北星女子短大紀要 *Journal of Hokusei Jr. Col. Vol. 36 : 119－127, 2000*

英語の文における意味的機能の検討

― 英文の仕組みの指導にむけて ―

A Study of Semantic Function in English Sentences

棚　瀬　江里哉
Eriya Tanase

ABSTRACT

This paper examines semantic functions in English sentences. Semantic relations between the predicate verb and its arguments make it possible to understand and explain many things that have been ignored or overlooked in the traditional Japanese approach－*five sentence patterns based on grammatical functions－to teaching* English sentence structure.

Key words: semantic roles, argument structure, verb patterns, sentence structure

0．はじめに

日本の英語教育において、英語の文の仕組みの指導を考える際にまず取り上げなければならないのがいわゆる五文型である。実際、安藤(1983)や三宅(1978)が述べるように、五文型には教育上有用な面がある。また、かねてから指摘されていた必須副詞句の問題（He is in the garden.の in the gardenの類）も文の要素としてAを認定し、七(八)文型に修正することで、一応の解決を見る方向にある（クワーク、他(1995)、安藤(1983)、村田(1984)等を参照)。しかし、五（七または八）文型による指導のみでは解決できない重要な問題が、次節で取り上げる意味的機能の問題である。

よって本稿では、英語の文において広い意味での「意味」が「形式」としてどう実現されるか、より具体的には動詞句とそれと結びつく名詞句にはどのような(意味的)関係があるのかを探ってゆきたい。そのために先行研究を検討してゆく。なお、表現英文法の指導の観点から、最終的には英語学習者が実際に英文構造を理解し、かつ文を自分で組み立てることができるようになることを目標としているが、本稿は指導内容の構成に向けての基礎理論となるものである。

1．文の要素の「意味的機能」について

1．1．村田(1984)の「文法的機能」と「意味的機能」

文を構成する要素の機能は大別して3種に分けられる。文法的機能、談話構造的機能、意味的機能がそれである。いわゆる「五文型」は文法的機能に留意したもので、文を構成する要素の文法的機能を主語S、述語動詞V、目的語O、補語C、修飾語句とし、それらの配列を5つの形に分けたものである。しかし、意味的機能に留意することによって、文法的機能による枠組みでは捉えることのできない事象が説明できることが多い。

1.a. Tom sang a song.

b. Tom saw a snake.

a.では、トムは歌を歌うという動作を引き起こした「意図的」な存在であり、b.ではトムは見ようと意図したのではなく、蛇が目に入ったのである。つまり、述部に表された過程に受動的に巻き込まれた「非意図的な」存在である。a.のような文における主語の意味的機能を「動作主格」agentive と言い、b.における主語の意味的機能を「受容格」recipient という。

すなわち、主語という同一の文法的機能に対して、異なる意味的機能が結びつきうるのであり、文法的機能と意味の間に一定の関係は成立しない。

2.a. The door opened.

b. John opened the door.

c. A key opened the door.

d. John opened the door with the key.

b.,d.の主語Johnは動作主格である。a.の主語 the door は意図的ではないし、動作を引き起こす主体でもないので動作主格ではない。受容格は通例有生物であるので受容格とも異なる。このドアは動作の対象としてその影響を受けるものである。このような意味的機能は「影響格」affected である。

c.の主語 a key は述部に表された動作を引き起こすことに一役買ってはいるが、動作の主体ではないし、意図も持ち合わせてはいない。この鍵はドアを開けるという動作の手段である。c.におけるa key と、動作主の示されたd.におけるwith a key は同一の意味的機能を担っており、それは動作主の行う行為に対して補佐的な役割を担う無生物の力である。このような意味的機能を「道具格」instrument という。(54-57　以下、各段落末の数字は当該書のページ数を示す)

文法的機能の観点からすれば、これら4つの文は主語が異なっていたり、目的語があったりなかったりで、共通性が捉えにくい。これに対して意味的機能の観点からは動詞 open に対するほかの各要素の関係が一定であり、4つの文の意味的な共通性を捉えることができる。(59-60)

最初の3つの機能と「主語」との関わりで言えば、Halliday は、物質過程節（行為を表す節）においては、無標の場合、主語＝テーマ＝旧（情報）＝行為者となる、と言った。主語が文法的機能、テーマと旧が談話構造的機能、行為者が意味的機能をそれぞれ受け持っている。例えば、受動態に関して言えば、行為を表す節を中心に、主語（＝テーマ）と意味的機能（行為者か、行為者以外か）の結びつきが問題となる。以降では、もっと広く文法的機能と意味的機能の結びつきを見てみたい。

なお、意味的機能は、この場合は、(意味的な)「格」関係として捉えられている。ほかに、意味役割、主題関係、などの概念があり、学者によって、また、論文によって、様々に重なっていたり異なっていたりする。本稿においては、以後は特に断らない限り、「意味役割」を用いる。

1．2．クワーク、他(1995)における参与項の意味役割

1．2．1．節要素の典型的な意味役割

どの節が描写する状況にも、一つ、或いは複数の参与項participantsがあり、名詞句によって具現化される。ほかに、副詞類が場所、時間、様態などを表す。

直接目的語を持つ節において、主語の典型的意味役割は動作主的(agentive)参与項である。つまり、動詞によって表される出来事を誘発したり引き起こしたりする有生の参与項である。

直接目的語の典型的意味役割は被動体(affected)である。つまり、動詞が表す出来事を引き起こさずにほかのなんらかの方法で直接

その出来事に関わる参与項である(なお、クワークたちはaffected という名称を用いながら、定義の内容には"affected" (影響を受けるということ) を含めていない。また、動作を受ける、ということも述べていない。直接関わる、というのはわかりにくいのではないだろうか)。間接目的語の典型的意味役割は受容者recipientである。つまり、出来事、または状態に、受動的に関わる有生物である。

主格補語と目的格補語の典型的役割は属性attributeである。同一認定identificationと、特徴づけcharacterizationの二つの下位タイプを認めることができる。

3. Kevin is my brother.

4. Martha was a good student.

(375-6)

1．2．2．主語の意味役割

主語は外的使役者external causerとしての役割を持つことがある。つまり、意図せずして出来事の原因となった（一般に無生の）ものである。

道具instrumentは動作主がある動作を行ったり、ある過程を引き起こしたりするのに使う(一般的に無生の) 個体である。

自動詞の場合、主語は被動体affectedの役割を持つことがある。

5. The pencil was lying on the table.

これは連辞動詞の主語にも当てはめうる。

6. The pencil was on the table.

その場合は、補語の下位区分に応じて主語もidentified(3.のKevin)と characterized(4.のMartha)に区分される。

自動詞の主語としての被動体は、対応する他動詞が、被動体である直接目的語として同じ名詞句をとっている場合にもっとも明らかである。

7.a. I am frying the fish. （被動体が直接目的語）

b. The fish is frying. （被動体が主語）

(377-8)

クワークたちは（連結動詞としての）動詞beの主語の意味役割が被動体だと言っている。しかしこれにはやや問題がある。上の「連辞動詞の主語にも当てはめうる」の箇所は CGEL では"has been generally extended to subjects ～"という言い回しである。「一般的に拡張され用いられてきた」という感じであろう。5.から6.なら拡張ととってもいいが（誰かがテーブルに鉛筆をおいた→鉛筆は被動体であり、かつ、鉛筆はテーブルの上にある)、3.,4.のKevin やMarthaに関してはむずかしい。だからこそ、クワークたちもすぐに下位区分を持ち出しているのだと思う。ちなみにHalliday (1994) では関係過程の参与要素を最初から carrier - attribute とidentifier - identified の二つの系列に分けている。

have, own などの動詞においては主語は受容者である。次のような関係によって示されるとおりである。

8. Mr.Smith has given his son a radio. [So his son now has a radio.]

see, hear などの知覚動詞は経験者experiencer主語を要求する。この点で動作主的なlook at, listen to などと対比される。認識、感情を表す動詞にも経験者を主語として求めるものがある。通例、受容者と経験者の主語は状態的用法の動詞と使われる。(379-80)

(CGEL では experiencer とは連辞動詞の有生の主語で、感情を表す補語を伴うもの (He is unhappy.)、また、意図を伴わない他動詞のうちのあるものの主語(I've hurt my knee.)、と説明されている。また、see, hear,の主語を受容者としている。変更したの

かもしれない。)

主語は位置保持者positionerの役割を担うことがある。sit,standなどの姿勢を表す自動詞、carry,keepなどの姿勢動詞と関係する他動詞の場合である。位置保持者は状況をコントロールしているが（有意図、状況を引き起こす)、状況は結果的なものではない。状況が継続する間、位置保持者に変化は起こらない。

主語は状態や動作の場所を示す位置locative、また、その時間を示す時間temporalという役割を担う場合もある。

主語の表す重要な役割の一つに出来事eventiveがある。主語名詞句の主要部の名詞は動詞から派生したものが多い。

何らの参与項が必要とされない節もある。この場合、主語の機能は支え語のitによって担われる。これには意味内容が殆ど、あるいは全くない。 (380-381)

次のような優先順位の体系が一般的に成り立つ。

動作主、外的使役主、あるいは位置保持者があれば主語になる。なければ、
道具があれば主語になる。なければ、
被動体があれば主語になる。なければ、
時間、位置、出来事があれば主語になりうる。
なければ、
支え語itが主語になる。(384)

2．英語の動詞の意味特性について

前節では、主語を中心に、意味機能の面から見てみたのだが、これは必然的に動詞とどのように結びつくか、ということにつながる。本節では、文の要としての動詞、という観点から検討を続ける。

2．1．動詞型言語としての英語 — 安井(1988)より

英語は、間違いなく、文が動詞を中心にして組み立てられている言語である。
それをもっとも明白に示しているものの一つは、フィルモアの格文法である。格文法の背後には、「動詞が決まれば、それを取り巻き、それと結びつく名詞が決まる」という考え方がある。いわば、太陽系の太陽に当たるところに動詞が位置し、それが決まると、それを取り巻く惑星として、名詞句が決まってくるといった形を考えることになる。例えば、open という動詞が決まると、それを取り巻くAgent, Object, Instrument などを表す名詞句が配置されるように。(176,257)

チョムスキーの Aspectsでは、これと一見逆のように見える立場が取られているが、実質的には、フィルモアと異ならないと考えてよい。LGBでは、動詞が中心になって文の構造が決まってゆくという立場が明確になっているとしてよい。この点は Halliday(1985)においても、紛れのない明確な形で認められている。彼によれば、我々が現実世界を見るとき、もっとも紛れなくわかるのは何かというと「何かが起こっている」(goings-on)である。この出来事をあらわすのが作用(process)であり、動詞グループによって具現化される。作用には様々の型があり、その型によって参与者(participant)が決まってくる。(257-8)

2．2．吉川(1995)における格理論 — フィルモアに基づく

なぜ動詞のふるまい方を中心に英語の文法を考えるかというと、どんな言語でも「述べること」の中心は述語であるはずだからである。(i)

文成立の要素として命題部分とモダリティ部分があるとして、命題部分の中核は、出来事、状態、関係を描く動詞、叙述形容詞など、広義の述語に相当するものであろう。述語はそれが

表す動作・作用・状態などに関与するいくつかの補いの名詞句＝項(arguments)と密接に結びつき、それらの項を支配している。比喩的に言えば、述語が動作、状態というような文全体のシナリオを描くから、そのシナリオに登場する役者（項）の数とその配役（意味役割）は、述語によってあらかじめ決まっている。

例えば、buy という動詞は次のような意味役割の項を必要とする。

9.a. x buys y from z for w.

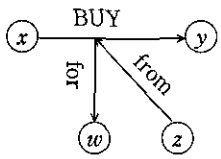
b. BUY {x,y,z,w}

x = Agent（仕手）

y = Object（対象）

z = Source（起点）

w = Beneficiary（受益者）



但し、項を実際に配置する場合には、起点、受益者、の順に省略され、舞台に登場しないこともある。さらにシナリオの比喩を続けると、役者の舞台衣装が格標識 (buy from z のfrom)、そして配置が語順となる (buy w y と buy y for w)。 (1-5)

2．3．Chomsky(1986)における "canonical structual realization"(CSR)

動詞がある semantic category 意味範疇 C を s-select 意味選択する場合に、ある統語範疇を c-select 範疇選択する、としよう。その統語範疇が C の CSR (CSR(C)) である。

意味選択としては、動詞 hit は補部に patient をとり、主語は agent である。さて、CSR(patient) と CSR(goal)が NP だとすると hit は NPを範疇選択するわけであるが、CSR が NP や節などに決められるなら、範疇選択は余剰であることになる。(86-88)

動詞が指定する意味役割（項構造）によって統語範疇が決まってくる。ということは、項構造をまず考えるべきである。

本節で取り上げた各研究には共通点がある。つまり、文の組立の中心は動詞であり、特に項構造、すなわち、ある動詞（述語）が統語的に必要とする意味役割の集合、どのような意味役割を持った名詞句（及び節）とどのように（どんな語順で）結びつくか、が大きな意味を持つ。

なお、文を組み立てる際に考慮しなければならないのは、英語の語順は固定的であり、主語の位置に名詞句を必要とすることである。文の中心である動詞が、主語名詞句とどう結びつくかは重要な問題と思われる。

2．4．影山(1996)における動詞の意味構造

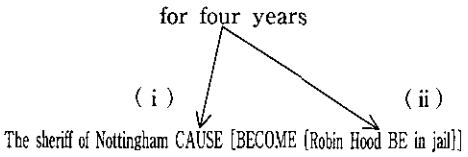
文の中で、命題部分の意味を分析する方法として、生成文法では２つのアプローチが試みられてきた。一つは動作主や対象物といった名詞句の意味役割を設定する方法で、格文法からGB理論などに引き継がれてきた。しかし、意味役割だけでは、アスペクト(語義相)をはじめ、動詞が持つ様々な意味特性は明らかにならないし、副詞の修飾関係などを表示することもできない。

10.a. The sheriff of Nottingham jailed Robin Hood for four years.

これは、ノッティンガムの執行官は「４年間にわたって投獄と保釈を繰り返した」と、「４年間ずっと牢に入れておいた」の二つの解釈がある。前者の解釈では、for four years は牢に入れる行為の継続期間であるが後者ではロビン

が牢に入っていた期間である。これは、jail が動作主と対象者を取るというだけでは説明がつかない。そこで、次のような意味構造を仮定する。

10.b.



この図は、CAUSE, BECOME, BE in jail のような表面上は現れない架空の動詞（意味述語）を想定して、「執行官がロビン・フードを牢の中にいる (be in jail) ようにした (CAUSE)」という意味を表している。すると、for four years が修飾する可能性が 2 とおりあることが意味構造における修飾関係としてうまく捉えられる。

このような、表面には表れない抽象的な意味要素を用いて単語の意味を分析することを語彙分解、または述語分解という。グルーバーから始まり、生成意味論、そして近年の Jackendoff などに広まっている。この理論では、名詞句の意味役割は動詞の意味構造そのものから読みとることができ、したがって動作主などのレッテルは不要になる。たとえば 2. では、CAUSE の主語の sheriff が動作主であり、BE in jailの主語である Robin Hood が対象物であるという解釈が副次的に出てくるのである。(38-40)

意味構造と統語構造を峻別して考えるのなら、動詞を基礎的な意味要素に分解する手法は有益な知見をもたらす可能性がある。統語構造のあり方を意味構造に反映させるのは重要なことである。言語というものは形と意味の二つの側面がそろって成り立つものであるから、意味構造を考える際にも、統語的、ないし形態的裏付けに基づいて考察を進める必要がある。(41)

文の命題部分の二つの分析方法がある。

- 意味役割、項構造
- 語彙分解、語彙概念構造（動詞の概念的意味を抽象的な述語概念で表示した構造）

どういう考えをとるべきであろうか。それぞれの、説明力がつよい部分を用いるという考え方もあるが、学生が英語を組み立てるための指導につなげるという点では、意味役割、項構造の方が分かりやすいのではないだろうか。

前節では、文法機能（主語、目的語等）と意味機能（意味的格、意味役割）の区別、クワークたちの主語の意味役割の分類に触れ、英語の文の仕組み、表現のための英文法の指導、という目標のために、意味機能と統語構造の関係を扱った。ただし、安井(1988)で端的に問われていた「英語の文を組み立てる中心は名詞か動詞か」という点では、要の部分は動詞である。方向性としては、動詞を中心にした英語の文の組み立て方、ということになり、広い意味での動詞の「意味」が問題になる。手がかりとして、項構造と語彙概念構造がある。現時点では、項構造に注目したい。そして、見通しとしては、実際に文を組み立てる指導につなげるためには、なんらかの形での動詞の意味的分類が必要になるのではないか。今の五（七または八）文型のように簡潔で応用が効くもので（五文型を修正する、というわけではない)、意味と形式を結びつけたものである。

3．英語の項構造について — 三宅(1978)と Lyons(1977)より

3．1．三宅(1978)の "Term Analysis"

一般に「文型」といわれるものが実践英文法では重要である。文型とは、基本単文中の動詞の重要性から考えて、動詞型を中心とするのが正しい考え方である。

動詞型には次の3つがある。.

1. 自動詞と他動詞の2大別
2. Onions の5述語型
3. ホーンビーの25動詞型

1. は中学でも教えておかなければならない。2. は高校で、これを知っておかないと困る。3. は良くできていて、これで十分とも思われるが、複雑すぎる面もある。

新しい角度から動詞型を考えるために、term analysis というものを考えてみる。たとえば、前置詞句の扱い方を見てみよう。

He keeps his car in the garage. と
He washes his car in the garage.

とでは、前置詞句の機能が異なり、keep, put, などの場所規定は動詞自体と密接な関係を有する。wash の方は前置詞句が必須の要素ではない。

また、

He congratulated me on my escape. と
He congratulated me that I had escaped.

とは、通常の分析では別々に扱われるが、このon句と that節は同じ機能を有する。さらに、

He congratulated me.

ともいうが、これは必ず「何かに関して」私をcongratulate しているのであり、on句が suppression を受けている。

そこでここの文法では、keepも、congratulateも、本来動詞の性格から見てtwo terms つまり2項を要求するもので、場合によってはその1項がsuppressされる、もしくはunderstoodになると考える。

たとえば、buy であればふつうbuyer とsellerとgoodsとmoneyが必要で、そのうちbuyerは能動文で普通主語に立ち、あとは buy a book from him for 1000 yen. となる（なお、buy に関してはもう一つ、ultimate recipient「最終受け取り者」も項としている)。

動詞のとる term は、主語を別種の term とすれば、

1.no-term verbs: burn, etc.
2.one term verbs: eat, etc.
3.two term verbs: give, etc.
4.three term verbs: sell, etc.
5.four term verbs: buy, etc.
(5:20-21)

補足を行うと、We ate too much. においては、food という目的語がimply されている。I bought a hat. ならば、(買い手、商品以外に) 誰から、誰のために、いくらで、のあと3つのterm がimplyされている。どういう動詞がどういうtermを要求するかは、半ばは言語の事実により、半ばは常識と論理によって決まり、出来合いの基準はない。

「いつ」、「どこで」、「どのようにして」などを表す副詞句は、存在述定が多くの場合Place Adverbialを要求するのを例外として、VPの域外と見なし、non-term adverbial と呼ぶ。それに対して、I rely on you. のon you は動詞との結びつきが密接であり、VPの域内と見なし、term adverbial と呼ぶ。

主語は常に動作主とは一致しない（The door opened.. The key opened the door. 等)。何が主語になりうるかというのは、非常にやっかいな問題である。とにかく、主語をterm（VP域内のV以外の要素）とはせず、head item とする。従って

main items: 主語、述語動詞、および terms
subsidiary items: non-term Adv
(6:30-31)

必須副詞句の問題を、クワークたち（や安藤や村田）は五文型の修正という形で扱った。三宅はtermと考えるのだが、他の termとの関係が今一つすっきり見えない。その点ではA という明確な形で表す七（八）文型はわかりやす

い。

上の分析の多くを三宅はフィルモアに負っているが、この部分と関連しては、door を Objective, key は Instrumentalなどと考えると格文法になるが、この考え方に幾多の利点はあっても、当のフィルモア自身が行き詰まって今は語らないところを見ると、何か発展を拒む支障があると考えざるを得ないと述べている。そして、ホーンビーの25型をterm analysisの観点から検討するということになる。筆者としては、動詞のとる項の数ももちろん問題であるが、文型（動詞型）と意味との関わりを探っていくことが重要と思われる。

繰り返すことになるが、主語は大きな問題点であり、英語の文の仕組みの指導においても、最も重要なことの一つになると思う。まず、一つには、後に三宅自身が認めているが、彼の「主語」が不透明であり、安藤のようにargument に含めた方がはるかに扱いやすいという点がある。ただし、同時に、argument の中でも主語には特別の一面があるということもあるので、主語と他のargument との関係も検討しなければならないであろう。また、英語の文で主語を立てるとき、主語と意味役割の結びつきが大きな意味を持つのではないか、と思われる。

3．2．Lyons(1977) の "Valency"

valency は、transitivity（他動性）や 支配 government といった概念を引き継ぎ、拡張したものであり、また、述語動詞がとる項 argumentの数ととらえることができる。例えば、伝統的に他動詞と呼ばれてきたものは、2 のvalencyを持ち（2価であり）、直接目的語を支配する動詞である。

しかし、動詞が結びつく expression の数だけが問題なのではない。それぞれの動詞と結びつく expression（の各組）の中身の違いも問題になるのである。たとえば、通例、give も put も3のvalency を持つ。しかし、それぞれが支配する3つのexpressionのうち、一つが違う。giveは主語、直接目的語、そして、間接目的語を支配するし、putは主語、直接目的語、そしてdirectional locativeを支配する。このような場合、両者のvalencyには違いがあり、それぞれ異なる valency set に属していると考える。(486-7)

動詞の（広い意味での）意味とvalencyにはかなりの程度に相互依存関係が存在しているのは明らかである。格文法は、valency を動作主、被動者といった意味役割と関連づけて説明しようとしている。(488)

上のvalency setの説明と関連して、ある動詞が支配する主語、目的語、などと、意味役割の間の結びつきを有機的に関連づけるのがまず課題となる。なお、valency に関しては、本来備わっている数があるということに注目したい。すなわち、本節では動詞と項との結びつきを、動詞を中心としていわば、腕が何本出ているか、という観点で見てきた。今後はその結びつきの具体的な中身を考えなければならない。指導上問題となると思われる語順との関連からも、やはり、文法関係と意味役割の関連性を探りたい。

・参考文献

安藤貞雄．英語教師の文法研究．大修館書店．1983

Chomsky, N. Knowledge of Language. Praeger. 1986

Fillmore, C. "The Case for Case", in E.Bach and R.T.Harms eds. Universals in Linguistic Theory. Holt, Rinehart & Winston. 1968

Halliday, M.A.K. An Introduction to Functional Grammer. Edward Arnold.

1985,1994
影山太郎. 動詞意味論. くろしお出版. 1996
Lyons,J. Semantics 2. Cambridge UP. 1977
三宅鴻.「教室英文法の試み」現代英語教育5,6.
研究社. 1978
村田勇三郎.「文（1）」. 研究社. 1984
クワーク,R.、他.「現代英語文法－大学編（新
版）」. 紀伊国屋書店. 1995
Quirk,R.,et.al. A Comprehensive Gram-
mer of the English Language. Longman.
1985
安井稔. 英語学と英語教育. 開拓社. 1988
吉川千鶴子. 動詞の文法. くろしお出版. 1995